

学術情報リテラシー

教育担当者研修

(2011年10月20日:大阪大学)

学生の学びを支援するために

九州大学教育改革企画支援室 特任助教
小貫(おぬき)有紀子

2日目朝一番！

- 最初に、声を出して2日目の「チェックイン」をしていきます。
- グループで1人ずつ30秒でチェックイン

- 名前

- 今、どんな気持ちでいるか

まず何を話すか、30秒間考えてください。



"Why I am here" Stories

- 「学生の学び」を中心にした大学教育への転換の現状を再確認（講義）
- ダイアログ（対話）手法を用いて考える
 1. 図書館の中の学生の学びとは？
 2. 将来の姿から、問題の糸口を探る
- 講義のふりかえり

この講義の学習目標

- なぜ、今自分たちが「学生の学びの支援」を考える事が大切なのか、他者に説明できるようになる
- 学生の学びを促進するために、どのようなアプローチが考えられるか、自分の言葉で他者に説明できるようになる

SHOW TIME

「学生の学び」を中心にした
大学教育への転換



皆さんに質問です

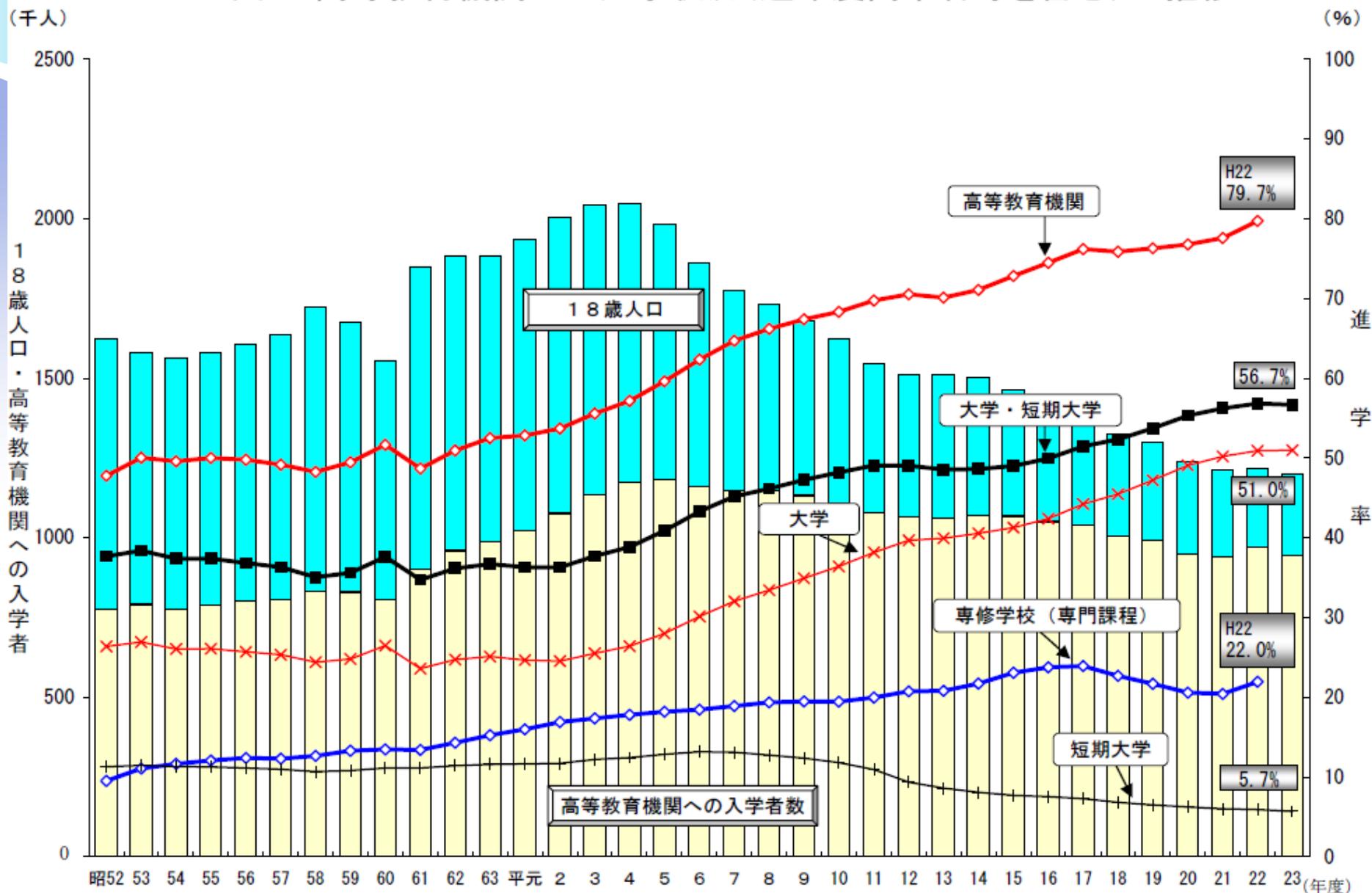
- 自分の中にある大学生・大学のイメージを再確認。

Q.「最近の大学生は…」に続く言葉は何でしょうか？

- 自分で考える(1分間)
- ショルダーワーク(2分間)

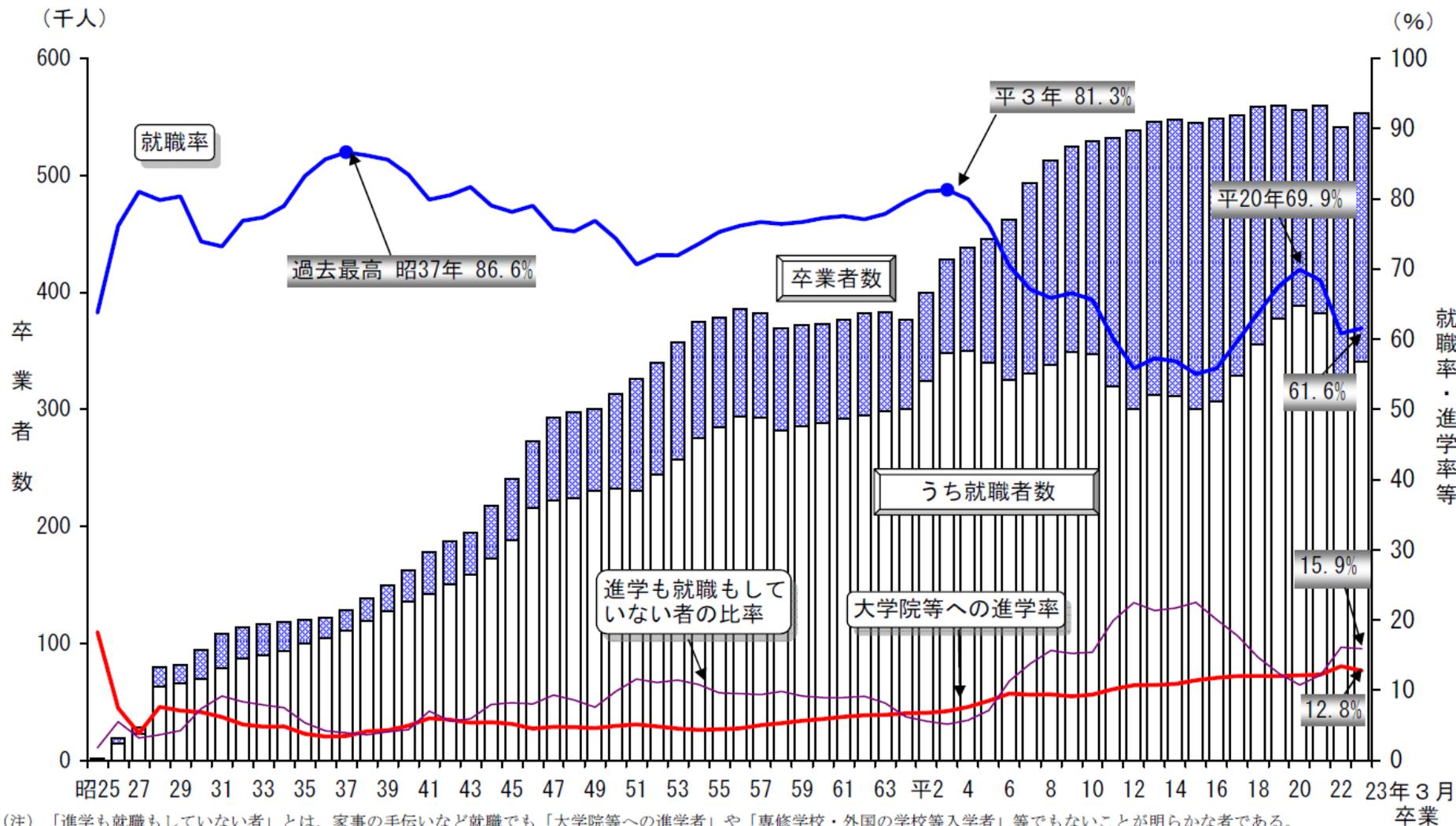
79.7%(平成**23**年度)

図3 高等教育機関への入学状況(過年度高卒者等を含む)の推移



(注) 1 18歳人口とは3年前の中学校卒業生及び中等教育学校前期課程修了者数をいう。
 2 「高等教育機関」のうち岩手県、宮城県及び福島県に所在する専修学校(専門課程)入学者については未集計のため、平成23年度は反映していない。また、「専修学校(専門課程)」についても同じ。

図5 卒業生数、就職者数及び就職率等の推移 [大学 (学部)]



(注) 「進学も就職もしていない者」とは、家事の手伝いなど就職でも「大学院等への進学者」や「専修学校・外国の学校等入学者」等でもないことが明らかな者である。
 また、昭和62年以前の数値には「一時的な仕事に就いた者」を含み、平成15年以前の数値には、「専修学校・外国の学校等入学者」を含む。

大学進学率(国別)

	進学率 (2006年)
日本	54.6%
アメリカ	53.1%
イギリス	62.5% (25.5%)
ドイツ	23.6%
韓国	101.6% (83.8%)



典拠：
文部科学省(2010)より

最近の大学生

学生の 多様化

遊び離れ、勉強志向の高まり

学力低下問題

部活・サークル加入率の低下

友人関係の狭小化・希薄化

女子学生のキャリアの広がり

相談相手としての教員

日本の「学生」vs 欧州の学生

- 日欧の学生：一週間の平均的な時間の過ごし方（日本労働研究機構）
 - 授業への出席時間 第2位（1位スペイン）
 - 授業外での学習時間 7時間（10カ国中、最下位：平均15時間程度）
 - 課外活動やアルバイトは平均的

大学教育は「学生の学び」に注目

教員(大学)が
何を教えた(提供した)か



学生が
何をどのように学んだか?



学習
成果



学生が何をできるようになったか?

学習パラダイム

教授パラダイム	学習パラダイム
知識は教員から学生へ伝授される ／学生は情報を受動的に受け取る	学生は情報を集め、組み合わせ、統合することを通して知識を構築する ／学生は主体的に関与する
知識の活用を想定せず、習得することが強調される	現実の生活における課題や問題を解決するために知識を活用し、繋げることが強調される
正しい答えが強調される	より良い質問を生み、失敗から学ぶことが強調される
文化は競争的かつ個人的	文化は協働的、共同的かつ支援的
学生だけが学習者と見なされる	教員と学生は共に学ぶ

考えてみてください

- 実は私たちは、大学教育の大きな節目に立ち会っている…らしい
- 過渡期の今、皆さんの大学での教育は、2つのパラダイムのどこでバランスを取って進めているのでしょうか？
- 図書館は、大学が目指す学習者像に、どのように貢献できるのでしょうか？

SHOW TIME

ダイアログ①
図書館の中の
学生の学びとは？



豊かなダイアログ（対話）に向けて

Ground Rules

- 全員が平等に参加する
- 人の話はさえぎらない、相手を頭から否定・非難しない
- 一人一人がこの講義に貢献する（テーマから逸脱しない、時間を守る）

	ダイアログ	ディスカッション
前提	誰もが良いアイデアを持っているはずだ。それらを持ちよれば、よい解決案が見いだせるだろう。	正しい答えがあるはずだ。それは自分の答えだ。
態度	協力的：参加者は、共通の理解を目指して協力する。	戦闘的：参加者は、相手が間違っていることを証明しようとする。
目的	共通の基盤を探ること。	勝つこと。
聴き方	理解しよう、意義を見いだそう、同意しようとして相手の話を聴く。	相手の欠点を探しながら、そして反論を組み立てながら、相手の話を聴く。
相手の評価	相手の強さと価値を探す。	相手の欠点と弱点を探す。

ダイアログ①

- ▶ グループで力を合わせ、発想を広げる。なるべく多くのアイデアを出していく。

Q. 学生は図書館の中で、いつ・どこで学んでいるのでしょうか？

- 自分で考える(1分間)
- 1人1分で発表＋自由に話し合う(10分間)

発想を広げるコツ

意見を言う時は、

Yes, and... (それに加えて...)

から始めます。

学生の学びを促すヒント

ティップス先生から7つの提案(教師編)

1. 学生と教員が接する機会を増やす
2. 学生間で協力して学習させる
3. 学生を主体的に学習させる
4. 学習の進み具合をふりかえらせる
5. 学習に要する時間を大切にする
6. 学生に高い期待を寄せる
7. 学生の多様性を尊重する

学生はいつ学ぶのか？

- 学ぶ内容が自分の生活にとって意味がある（学ぶことが必要だ）と納得している
 - 最初に学習目標や今日の内容を提示
 - 学習内容を具体的&日常的なエピソードで紹介
- 能動的に参加する機会を持つ
 - 少人数のグループ活動に挑戦
- 学生が主体的に考える時間を持つ
 - 「体験」「実践」する中で、知識は活用される
 - 最後にふりかえりをする時間をもつ（定着）

SHOW TIME

ダイアログ②
将来の姿から、
問題の糸口を探る



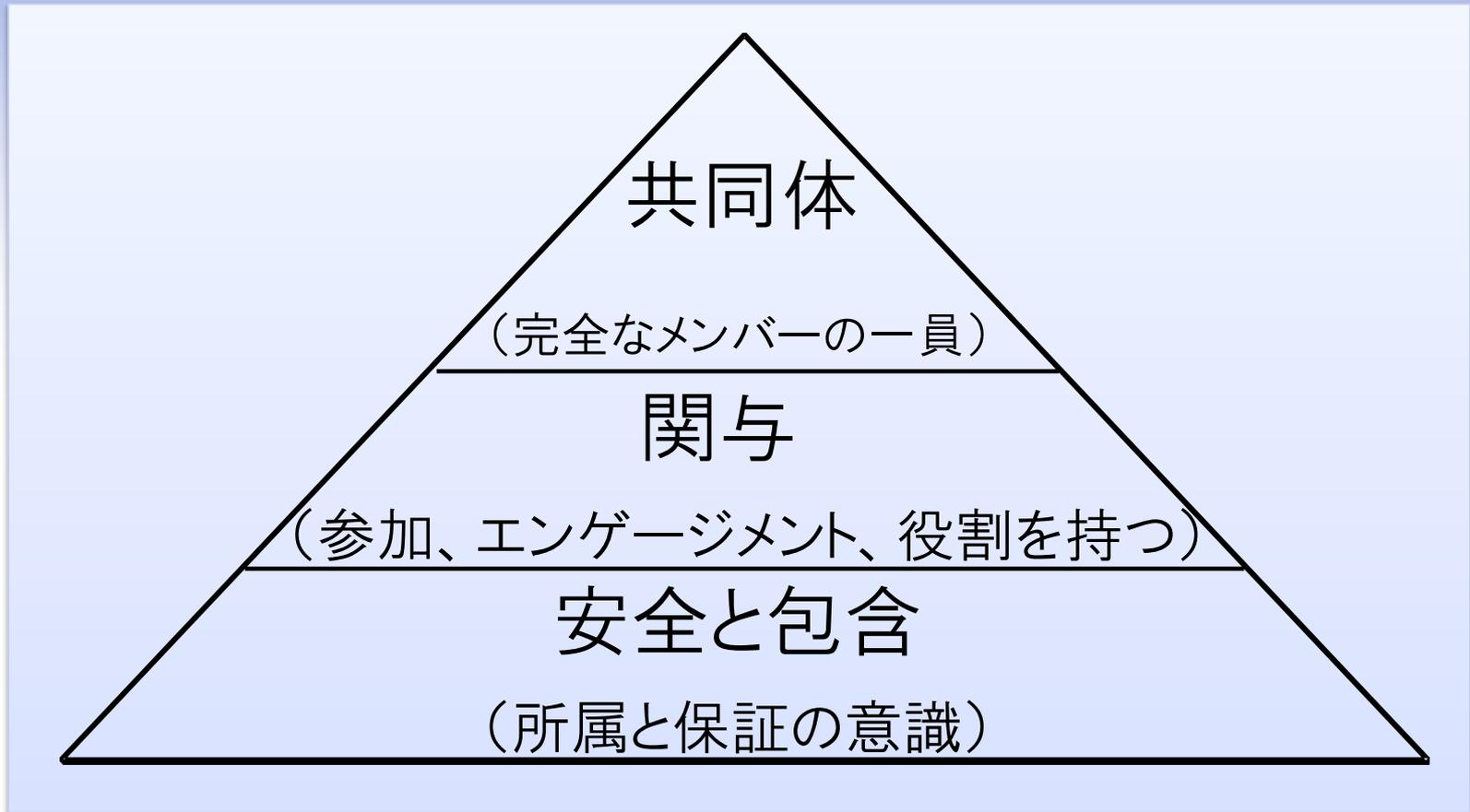
ダイアログ②

▶ 将来の姿から、問題の糸口を探る

Q. ○○年後に、自大学の図書館が「学生の学び」の充実度で絶賛されるようになりました。図書館はその時、どんな状態になっているのでしょうか？

- 自分で考える(1分間)
- 1人1分で発表＋自由に話し合う(10分間)

学習環境の3段階モデル



Strange & Banning(2001)

学びの共同体の特徴

- キャンパスを学習活動の場として認識することが共有されている
- 相互作用(学生同士、教員と学生、職員と学生、教員と職員)を生み出すことが留意されている
- **学生の主体的な参加**が奨励されている
- 一人一人がコミュニティの中で役割を持っている

SHOW TIME

今日の講義のふりかえり



今と将来のギャップを埋めるために...

➤ 今日のダイアログでやったこと

「現在の状態」→「将来の理想」

■ 2つの間のギャップを埋めるもの＝「支援」

➤ 具体的な行動(支援のあり方、方途)は、今から皆さん自身で作って行ってください。

➤ 是非、職場の仲間とも、対話を通じて「学生の学びの支援」について共有を！

学習支援者としての役割

	管理運営的		教育的	
	学生の管理	学生のサービス	学生発達 (SD)	学生の学習
学生支援の目的	学生を支援するために大学の資源をマネジメントする	教育ミッションを補佐する	個人の成長や発達に焦点化した学生の教育活動において同等	学習ミッションにおける能動的パートナー
学生の位置付け	参加者	消費者	クライアント	学習者
学生担当職の位置付け	管理者	マネージャー	心理&認知発達の専門家	教育者
プロセス	学生生活の質に焦点	サービスの質や効果の改善に焦点	個人の学生の成長や発達に焦点	体験学習、アクティブラーニングへの学生参加
アウトカム	効率的、効果的オペレーション	学生の満足	心理・認知の発達や成長	知識・情報（スキル開発・個人の成長）

学びを促す関わり方(例)

- 学生が発言する機会をつくる
- 学生の言葉を頭ごなしに否定しない
 - 学生の相談やコメントは、真意が別にあることも。
- 良いタイミングで褒める(自己効力感を高める)
- 最初は丁寧に、徐々に一人で(最初から自律的な学習はできない)
- 電子媒体(メール、e-ラーニング)は、対面での支援を充実させるために使う
- 万能な手立ては無い(常に発想を豊かに)



- 講義の感想
- (余裕があれば)「学生の学びの支援」に向けて、明日から私はどう貢献できるか？

自己学習のための参考文献

- Blimling, Gregory S., and Whitt, Elizabeth J. (1998). "Principles of Good Practice for Student Affairs." *About Campus*, 10-15.
- Huba, Mary E., and Freed, Jann E. (2000). *Learner-Centered Assessment on College Campuses: Shifting the Focus from Teaching to Learning*, Needham Heights, MA: Ally & Bacon.
- 名古屋大学高等教育教育研究センター『ティップス先生からの7つの提案』(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>)
- 西村佳哲『かかわり方の学び方』筑摩書房, 2011年.
- 水越伸『メディアリテラシー・ワークショップ: 情報社会を学ぶ・遊ぶ・表現する』東京大学出版会, 2009年.
- 佐藤浩章『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部, 2010年.
- 上田信行『プレイフルシンキング: 仕事を楽しくする思考法』宣伝会議, 2009年.



ありがとうございました。